

市民病院だより

抗菌薬（抗生物質）のはなし

感染管理認定看護師

永瀨 智寛

今回は、薬剤耐性（AMR）対策アクションプランを推進するために、私たちができることをお伝えします。薬剤耐性とは、1つ以上の抗菌薬に対し耐性（効き目がなくなること）を獲得した状態をいいます。

薬剤耐性（AMR）対策アクションプラン

AMR対策を行わなければ、2050年には全世界での死者は1,000万人になり、がんよりも大きな問題になると言われています。日本でも厚生労働省が中心となり抗菌薬を未来に残すために、2016年～2020年にかけて6つの分野で、薬剤耐性菌の対策を充実させるためのプランが実施されています。（下記表参照）

| 分野 | 目標 |
|------------|---|
| 普及啓発・教育 | 薬剤耐性に関する知識や理解を深め、専門職などへの教育・研修を推進 |
| 動向調査・監視 | 薬剤耐性および抗微生物剤の使用量を継続的に監視し、薬剤耐性の変化や拡大の予兆を適確に把握 |
| 感染予防・管理 | 適切な感染予防・管理の実践により、薬剤耐性微生物の拡大を阻止 |
| 抗微生物剤の適正使用 | 医療、畜水産などの分野で抗微生物剤の適正な使用を推進 |
| 研究開発・創薬 | 薬剤耐性の研究や、薬剤耐性微生物に対する予防・診断・治療手段を確保するための研究開発を推進 |
| 国際協力 | 国際的視野で多分野と共働し、薬剤耐性対策を推進 |

引用：AMR臨床リファレンスセンターH・P

薬剤耐性（AMR）対策アクションプラン

これは、専門分野だけでなく、皆さんのご理解とご協力がなければ実現できない計画です。

抗微生物薬の適正使用について

抗微生物薬とは、抗ウイルス薬と抗菌薬の総称で、菌に対して使用される薬を抗菌薬と呼びます。抗菌薬は、一般では抗生物質と呼ばれています。

抗菌薬は、ウイルスに対しての効果はありません。インフルエンザをはじめとした、ウイルスが原因の病気に抗菌薬を使用しても、抗菌薬の効果がないばかりか耐性菌を増やしたり、副作用のみが出現したりする可能性があります。

風邪（感冒）をひいたり

風邪（感冒）は、発熱の有無を問わず、鼻症状（鼻汁・鼻閉）、咽頭症状（咽頭痛）、下気道症状（咳・痰）の三系統の症状が「同時に」「同程度」存在する病態とされています。

風邪の原因は80～90%はウイルスです。つまり、風邪を治療するときに抗菌薬を使う必要性

は高くないということです。しかし、2次的な感染を予防するために抗菌薬を使用される場合もあります。その際は、用法・用量を守らないと抗菌薬が効かない菌（耐性菌）が生まれてしまうことがありますので、医師の指示通りに途中で止めず飲み切ることが大切です。

私たちができること

- 基本的な感染予防である、手洗い・うがい・ワクチン接種で病気を予防しましょう。
- 「風邪をひいたら抗菌薬」「抗菌薬を使用しないから治療をしない」という慣習を見直しましょう。

抗菌薬を適切に使用することは、抗菌薬を未来に残すための重要なポイントになります。私たちの力で耐性菌を減らしましょう。

引用・参考文献

・AMR臨床リファレンスセンターH・P
・抗微生物薬適正使用の手引き 第一版



小児科診療時間を変更します

平成31年1月から毎週水曜日が休診になります。また、毎週木曜日の診療開始時間が10時開始（受付時間10時～18時）になります。よろしくお願ひします。

【問合せ】小城市民病院 ☎ 73・2161 ホームページ・アドレス <http://www.city.ogi.lg.jp/hospital/>

お知らせ